

ICME10報告(2) ブーメランを世界中の人に 西山 豊 (大阪)

ヨーロッパへは2度目である。前のときも疑問に思ったことだが、13時間も飛行機に乗るのだから地球の自転が関係しないかということである。北極から眺めれば地球は反時計回りに24時間でまわっている。とすると、日本からヨーロッパへ行くのと、ヨーロッパから日本へ帰るのは飛行時間が違うはずだ、と。もちろん、こんなことはない。これは物理学という慣性系の問題で、時速100キロで走っている電車の中で飛び上がっても電車だけ進むということはない。しかし飛行機は13時間も空中に浮いている、しかも自らの動力でどちらでも行き来できるのである。ほんとうに自転が影響していないのだろうか。実際は北半球では偏西風が吹いているのでヨーロッパから日本へ帰るほうが1時間ほど短い。空気は地球と一緒に回っている。そうすれば大気圏を脱出すれば空気の移動から抜けられるわけだから、自転を利用できることになる。しかし、飛行機は空気による揚力で浮いているから、それは不可能である。空気の中にいるかぎり慣性系からは逃れることはできない。飛行機とロケットの違いは、など、今回も疑

問が未解決のままに終わってしまった。

さて、ICME10の報告である、私は、マセマティカル・サーカスに参加した。登録者は全体が35名であるが、早い時期にエントリーしていたので2番目に登録されていた。3つのテントの中で、数学パズルやゲーム、ジョグリングなどがあり、ICME10参加者の憩いの場といったところである。

私のICME9(幕張)のときはポスターセッションに参加したが、それでも紙製ブーメランには異常な人気があったので、ICME10には本格的に取り組もうと準備してきた。ブーメランの作り方、飛ばし方、戻ってくる理由をのせた説明書、これは27言語に翻訳してある、ブーメランの英語論文、板目紙、ハサミ、定規などを持ち込んだ。特に板目紙はかなり重くて100枚しか持っていけなかった。

大会の4日間はほとんど、このテントの中で講習を行った。1日目には地元のテレビ局の取材があり、当日夜に放映されたこともあって、翌日はデンマークの親子が多く参加した。テレビで見たあの紙製ブーメランが欲しいというのだ。

私は、必ず体験してもらうことにしている。プリントと材料だけ持って帰る人は断った。そして、キャッチできた人には認定のスタンプを押すことにしたので、参加者はさらに熱が入った。姉弟の子供をつれた

母親がきた。姉は1回でキャッチできスタンプをもらった。弟はなかなかキャッチできない。母親が弟にもスタンプをといたが、キャッチした人にだけといったので、弟は必死になった。なかなかとれない。弟は半泣きになった。そこでおまけでスタンプをあげようといったが、弟はいやがった。キャッチできるまでがんばるというのだ。多くのギャラリーが見守る中、数十回のうちキャッチでき、拍手がわきおこった。

全体で300人くらいは、紙製ブーメランを体験してもらえたように思う。また、27言語に翻訳していたので多くの研究者と母国語での交流もできた。英語、中国語、スペイン語、アラビア語、フランス語、ロシア語、ハンガリー語などに翻訳しておいてよかったと思った。また、日本から参加している方に講習の協力をさせていただいたことに感謝しています。

つぎの写真は吉田一氏の協力によるもので、中央に立っている男性はポルトガルの



人、座って指差しているのはタイの人、その横はスウェーデンの人と国際色豊かであった。

ポルトガルの男性は、投げてキャッチに成功し、成功すると確認のスタンプを押してもらえてご機嫌だった。



帰国後、カナダから説明書のフランス語版を送って欲しいというEメールが入ったので、さっそく送るとたいそう喜んでくれた。また、イギリスからはブーメランの理論についての詳しい説明を求めてきた。学术交流ができたわけだ。私の目標は77言語にまで翻訳することと、ブーメランを世界中に広めることである。